

文学博士島田謹二君の「日本における外国文学——比較文学研究——」

に對する授賞審査要旨

本研究は明治以降の近代日本における西歐諸國の文学の移植・定着の歴史を具体的な作品分析の作業を通じて実証的に跡づけたものである。近代日本文学はその表現様式において、趣味において、文学の内実を構成する人生觀・世界觀において、西洋文学の影響を無視して考えることは不可能であり、その文学史的な性格もひっきょう西洋文学のあり方を範例とすることが多かったというのが従來の定説である。ただしその外來の影響がいかなる経過を辿って我國に定着し、その消化・吸収を通じて近代日本文学の実態が形成されるように至ったかという点になると、これを個々の事実の実証を積み重ねて体系的に把握し、かつ叙述するのは一個人の力をもつてはなかなか成就しがたい難事業であつた。島田謹二君は四十余年にわたつて独力この課題に取り組み、森鷗外、夏目漱石、上田敏、島崎藤村、北原白秋、永井荷風、佐藤春夫、芥川龍之介等の諸作家の代表的作品を綿密周到に味読し、これらの諸家が西洋の文芸から形式を摂取し、趣味の感化を受け、素材の選択や扱い方を学び、しかもその心性・感性において独自の日本近代の文学の創造に成功している実状を分析的に追跡し、もつて近代日本文学において従來の文学史家の眼のとどかなかつた重要な面の解明を成し遂げている。その際著者は學問研究の成果が特殊な術語・文体によつて學界内のみの狭い通用に終つてしまふ傾向のあることを憂え、明晰暢達な文章によつて、學術研究の言語に批評性に富む開かれた文

芸様式を与えることにも成功している。

本書は文学史的には影響の実態をめぐる新しい諸事実の発見を豊富に提示すると同時に、ひとつの新しい研究態度の提唱として方法論上の成果でもある。即ちフランス、アメリカ両国の学界においてつとに承認され確立している比較文学的方法的理念が、我國の文学研究に適用される場合にも立派に成果をあげうることを示したものであり、その点でこれは日本の近代文学史の見方にひとつの転換をもたらすと共に、一般に我國の文学研究がより広闊な国際的視野に向って開かれねばならぬことを示唆する貴重な業績である。